

本庄早稲田の杜ミュージアム企画展
第5回本庄早稲田の杜地域連携展覧会

古代の 児玉・深谷地域

展示解説パンフレット

2025

1.18 SAT ▶ 3.23 SUN

会場 早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター
(早稲田大学93号館) 2階情報資料室

所在地 〒367-0035 埼玉県本庄市西富田1011

開館時間 9:00~16:30

休館日 月曜日(休日の場合は翌日)

入館料 無料



本庄市マスコット
「はにぼん」



美里町マスコット
「ミムリン」



神川町マスコット
「神しい」「なっちゃん」



上里町マスコット
「こむぎっち」



深谷市
イメージキャラクター
「ふっかちゃん」



早稲田大学キャラクター
「WASEDA BEAR」



HP

問合せ TEL 0495-71-6878 FAX 0495-71-6879 ✉ hwmm@city.honjo.lg.jp

共催 本庄市教育委員会・美里町教育委員会・神川町教育委員会・上里町教育委員会・深谷市教育委員会・早稲田大学

本庄早稲田
MUSEUM
の杜
ミュージアム

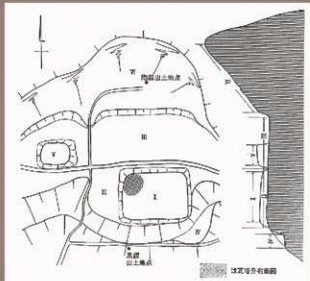
本庄市

古代の本庄市域は、現在の女堀川流域が児玉郡に比定しようと考えられるほか、北部の利根川右岸一帯を賀美郡、深谷市に接する北東側の一部が榛沢郡に属したと推定されている。本庄市域では深谷市の中宿・岡・熊野遺跡（榛沢郡）や幡羅官衙遺跡群（幡羅郡）のように、児玉郡家やこれに付属する寺院跡等の遺構は、これまで確認されていない。

寺山廃寺（本庄市児玉町河内）

寺山廃寺は小山川と稲葉川の合流点南西側に所在する標高約220mの山上に位置する。現地は山の南斜面に開けた狭い平場で、上層にローム層が堆積し、基盤は結晶片岩系の岩盤である。平場の2箇所に方台状の高まりがある。平場南縁の方台は40×30m以上の規模があり、地山削り出し成形によると考えられる。

遺物は瓦塔片少量と鉄製風鐸1点のほか、土師器・須恵器の坏類の破片が採集されているが瓦の出土はない。瓦塔片は方台部北西隅の4×4mほどの狭い範囲に散布した状態で確認されている。屋蓋部と軸部の破片のみで相輪部は出土していない。屋蓋部は丸瓦のみをヘラで一本描きしたのち半截竹管を用いたナデによって描出したのち、竹管の先端を当て、丸瓦の継ぎ目を表現している。垂木はヘラで輪郭を描き、周辺層の軸受けのための突帯がめぐる。



寺山廃寺地形概念図

（埼玉県古代寺院調査報告書1982刊、120頁、第74図から）

風鐸は南側の崖の直下で採集されている。鑄鉄製で、計測値は高さ21.7cm、口径14.9cmで、横断面は円形を呈する。下端部には4単位の波状抉りを形成し、うち一つが欠失している。表面には縦横及び斜めの突線と上部の突線区画の内部に3個1単位の乳が付されている。鈕は頂部に丸みのある三角形で下端中央に円孔を開けている。内面には鉄の丸棒を凹形に加工して取り付けられているが、鈕と鋸との軸線は20°のずれを生じている。採集された土器類の型式から、寺の造立年代は平安時代中頃で、地域の有力者の私寺と考えられる。
天神林Ⅱ遺跡（本庄市東台）

天神林Ⅱ遺跡は、本庄台地の北縁に東西約2kmにわたって連なる古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落遺跡群の一角に位置している。三脚土器は浅い鉢形をなす本体の底部外縁に、長さ15～20cm程の中実式の脚が3本取り付けられている。体部外面ヘラケズリ調整で、器壁が薄く、胎土には細砂粒が多く含まれる。製作年代は奈良時代後半期と推測される。



天神林Ⅱ遺跡出土三脚土器

2号住居跡から鉢部・脚部が残る3点と、鉢から離脱した脚部3点、さらに近接する1号溝からは脚部のみ14点がまとめて出土していることから、集落内の特定個所で使用・遺棄された様子がうかがえる。

三脚の付く器形は、金属製の煮炊具に系属を辿りうる。「湯立神事」・「湯神楽」などの祭事に関係する遺物であろう。

（本庄早稲田の柱ミュージアム 太田 博之）

美里町

美里町は、埼玉県の北西部に位置し、本庄市、深谷市、大里郡寄居町、秩父郡長瀬町に四周を囲まれた町である。地形的には、中央に広がる台地、低地の三方を、南西側は上武山地、松久丘陵が、北西・南東側は町域を画し連なる残丘が取り囲む独特の景観を呈する。

美里町の古代遺跡

町内の遺跡は、旧石器時代から中・近世にわたり、著名な遺跡も多い。奈良・平安時代の遺跡は、南西側の山地、丘陵部を除く町域全域に広がっており、とくに集中する領域はみられない。

ただし、奈良・平安時代の遺跡については、残存状態の良い瓦塔、瓦堂がそろって出土した東山遺跡をはじめとして、後述する烏森遺跡、北谷戸遺跡、宮ヶ谷戸遺跡や東山遺跡などのように石帯あるいは銅製の帯金具が出土した遺跡、銅鏡の出土した木部の原遺跡や北貝戸遺跡のように該期の可能性のある掘立柱建物跡が集中する遺跡、上野遺跡B地点のように櫛列に囲まれた菱形の区画域に複数の掘立柱建物跡が検出された特異な遺跡もあり、今後さらに検討が必要である。

なお町域中央、や東寄り、現在の美里町役場の近くには、「古郡」なる地名、字名が残されている。那珂郡衛の遺称地と目されているが、周辺を含め調査例が乏しく、特筆すべき遺構は検出されていない。

大仏寺出土の瓦、瓦塔片、鴟尾状土製品

大仏寺は、美里町のほぼ中央に位置し、上武山地から連なる丘陵から低地へと伸びる低位の小支丘上に立地する。遺跡は、現在ほぼ平坦な畑地であり、「地影状地形」、「基壇状部分」とされる略長方形のわずかな低い高まりがみられることが1985年の近接地における発掘調査時にも確認されている。展示した資料は、この高まりの周辺で採集された資料である。

軒丸瓦の瓦当文様は、単弁16葉蓮華文であり、瓦当周縁部と丸瓦部をすべて欠いている（写真1）。県史編さん室による調査時にも同種の瓦当文様の軒丸瓦が報告されており、かなり簡略化が進んだ段階の蓮華文とみられる。

瓦塔片は、これまでの同遺跡の表面採集によっても収集されており、複数個体の瓦塔、瓦堂の屋蓋部および瓦塔の軸部の壁体破片が含まれるとされている。いずれも須恵質で、胎土に白色針状物を含むようである。

諸特徴から、軒丸瓦片は8世紀後半、瓦塔片は8世紀後半から9世紀初頭の所産と推定されている。

鴟尾状土製品とした資料は、同じ地点から採集された資料である（写真2）。青灰色を呈し、白色針状物を含む堅緻な須恵質の土製品である。全長8.0cmを測る。金堂を模した瓦堂の棟の両端に取り付けられた部品である可能性が考えられ、とすれば異例と言ってもよい、とび抜けた大きさの瓦堂を想定することができる。

烏森遺跡、北谷戸遺跡、宮ヶ谷戸遺跡出土の石帯
烏森遺跡は北半の自然堤防、北谷戸遺跡は町域中央の台地端、宮ヶ谷戸遺跡は町域北西縁の丘陵から連なる微高地上に立地する。

烏森遺跡の石製巡方、宮ヶ谷戸遺跡の石製鴟尾は住居跡から、烏森遺跡、北谷戸遺跡の石製丸簷は遺構外で採集された資料である。

石帯や鈎帯自体官衙などに関わる階層の人々が身に着けた装身具ではあるが、とくに北谷戸遺跡の石製丸簷には、「白玉」とも呼ばれる石英質の石材が用いられており、一般集落跡ではみられない遺物であるとの指摘もなされている。



写真1 大仏寺出土
軒丸瓦



写真2 大仏寺出土
鴟尾状土製品

神川町

さいかちほら もとあほほ
皂樹原遺跡 (大字元阿保)

皂樹原遺跡は、神流川扇状地(本庄台地)上に形成された飛鳥時代から奈良・平安時代にかけての大規模な集落遺跡で、これまでに8回の発掘調査が行われている。累計約170,000㎡に及ぶ調査の結果、竪穴住居跡400軒以上、掘立柱建物跡約200棟、横口付炭窯25基、鍛冶工房跡3基、女堀大溝等が検出されている。

横口付炭窯

横口付炭窯は、製鉄に必要な木炭を生産するための炭窯で、皂樹原遺跡では25基検出されている。炭窯は関東ローム層を掘り込んで窯体をつくり、窯の焼成部にローム土を用いた天井を掛ける半地下式構造で、焚口・焚口作業場、焼成部、煙道、煙道土坑、横口、横口作業場から構成される。

皂樹原遺跡の炭窯は、女堀大溝の壁面を利用して規則的に築くものと、大溝から少し離れた場所に築くものに分けられる。これらの炭窯は、出土した土器などから集落の形成より少し遅れた7世紀末に出現し、8世紀中頃には終焉を迎えていたと考えられる。なお、横口付炭窯は、皂樹原遺跡の南にある金屎遺跡で1基、西にある久保宿遺跡で1基検出されている。



23・24号炭窯

女堀大溝

女堀大溝は、皂樹原遺跡の西にある神流川流域の低地部から取水した後、本庄台地面を横断するように掘削された溝である。掘削の目的は、遺跡より北東に位置する条里水田の灌漑用並びに集落への生活用水供給のためで、掘削時期は7世紀末前後と考えられる。



女堀大溝と横口付炭窯

鍛冶工房跡

3基検出された鍛冶工房跡の中でも、平面が長方形で、内部に複数の鍛冶炉を設置する2号鍛冶工房跡は、地方官衙に付属する官営の鍛冶工房として、地域における鉄器生産の中心的な役割を果たしていたと考えられている。



2号鍛冶工房跡

皂樹原遺跡の重要性

鉄生産に関わる横口付炭窯が確認され、炭窯の操業開始時期から複数の窯が同時に稼働していることから、皂樹原遺跡が木炭の大規模な生産地であったことが明らかになった。本遺跡のように平坦な地に数多くの横口付炭窯を築く遺跡は全国的にも珍しい。生産した木炭を使用する製鉄炉は未確認であるが、遺跡内もしくは近隣の地で発見されるであろう。

これまでの調査で古墳時代の遺構が、ほとんど検出されていないことから、皂樹原遺跡は7世紀後半から、空閑地を主に鉄生産のために開発に従事した人々の集落で、集落と横口付炭窯及び女堀大溝は、計画的に配置されていたと考えられる。

炭窯や集落が計画的に配置されていたと考えられる。炭窯が継続的に稼働していることを考えると、その導入には中央政府の関与が想定される。

(神川町教育委員会 北山 直人)

上里町

律令期の集落と人々

烏川と神流川が合流する上里町では、飛鳥時代から奈良時代にかけて、多くの集落が営まれてきた。発掘調査の結果から、この時期の集落遺跡を分析すると、それぞれ発生経緯が異なっており、大きく2パターンに分類することができる。

一つは、それ以前の古墳時代にルーツを持つ、古くから営まれてきた集落である。主に神流川沿いに点在しており、東狼見堂遺跡や高野谷

戸遺跡等である。当時の住居址からは、調理具や食器として利用された土器のほか、鍬や鎌、漁具である土鍾、鉄の加工に用いたファイゴの羽口等が出土する。人々は農業のほか、漁業や手工業に従事しながら集落での暮らしを営んでいた。また高野谷戸遺跡では、奈良時代の仏具である銅鏡（写真2）が出土しており、集落内で仏事が行われていたと考えられている。さらに、これら集落に近接した位置には五明庵寺が営まれた。五明庵寺は、出土瓦（写真1）の特徴から奈良時代に創建されたものと考えられており、銅鏡と合わせ、この時期に町内で仏教が信仰されていたことを示している。



写真1 五明庵寺出土
軒丸瓦（上）と軒平瓦（下）



写真2 高野谷戸遺跡出土 銅鏡



写真3 往來北遺跡の大溝

一方、この時期には、それまで集落が営まれなかった地域にも突如として集落が形成される。町内では、烏川沿いに北稲塚遺跡や田通遺跡、寺西遺跡等、本庄台地上に皂樹原・楡下遺跡や油免遺跡、立野南遺跡等が営まれている。飛鳥から奈良時代にかけて、それまで開

発が及ばなかった広大な烏川の低湿地や本庄台地上を積極的に開墾していったことがうかがえる。特に台地上にある往來北遺跡では、大規模な溝跡（写真3）が発見されており、水利の悪い地域には用水を引き、生活用水を確保していたことが判明している。また、これら遺跡からは日用雑器のほか、地方役人が職務で使用した硯やベルトに使われた金具（帯金具、写真4）、漢字の書かれた土器等も見つかっており、地域の支配者であった地方役人との繋がりをうかがうことができる。

このような新興集落を考古学では「計画村落」と呼び、律令国家やその配下に組み込まれた地方豪族達の支配によるものと捉えられている。しかし、国家による地方支配が弱体化する平安時代には、発掘調査で発見される住居址も大きく減少し、これら集落は突如として、消滅を迎えるのである。



写真4 帯金具
田通遺跡（上）
油免遺跡（下）



深谷市

古代の深谷市域は、西部が榛沢郡、東部が幡羅郡と大きく2つの領域に分かれ、南部の一部に男衾郡が広がり、それぞれの地域に代表的な遺跡が所在する。

榛沢郡には古代の郡役所跡（榛沢郡家）として知られる中宿遺跡が所在し、郡家の正倉院である倉庫群が県内で初めて発見されたことにより平成3年に県史跡に指定された。

幡羅郡では、櫛挽台地北東端部の熊谷市との市境付近に幡羅郡家である幡羅遺跡が所在し、熊谷市の西別府祭祀遺跡とともに幡羅官衙遺跡群として平成30年に国史跡に指定された。

男衾郡には、江南台地上に立地し、豪族の居宅跡が発見されたことで知られる百済木遺跡が所在している。

深谷市域では、これらの代表的な遺跡の周囲でも多くの関連遺跡や良好な遺物群が出土している。今回の地域連携展では、榛沢郡家と幡羅郡家を中心に、人々のくらし・生業を支えたモノを紹介したい。

榛沢郡家（中宿遺跡：深谷市岡）

中宿遺跡は櫛挽台地の北西端部に位置し、北側には妻沼低地が広がる。中宿遺跡では、台地崖線に沿って整然と並ぶ掘立柱建物跡が検出され、これらは7世紀末から10世紀までで続した倉庫群であり、北側の崖下に河川跡、東西に検出された堀跡が周囲を巡り、外からの進入を防ぐ役割の遺構配置状況から、税を納める倉が立ち並ぶ正倉院であると考えられた。



県史跡中宿古代倉庫群跡 復元倉庫

また、郡家の東側には岡遺跡が所在し、「榛」の字が刻まれた瓦が出土し、郡寺と考えられる廃寺跡が確認される。南側には、非常に多くの建物跡が発見される熊野遺跡が所在している。熊野遺跡では畿内産土師器が出土するなど、郡家成立に密接にかかわる痕跡が確認されている。

幡羅郡家（幡羅遺跡：深谷市東方）

福川左岸の櫛挽台地縁辺部に立地する幡羅遺跡は、これまでに36回にわたる範囲内容確認調査が実施され、正倉院・館・実務官衙城・道路跡といった郡家を構成する遺構群の存在が明らかにされており、非常に良好な遺存状況であることが確認された。熊谷市側には、官衙遺構の広がりや確認される西別府遺跡や西別府祭祀遺跡・西別府廃寺が所在し、当該遺跡群は郡家・祭祀場・寺院という古代官衙を構成する要素がほぼ揃っている点が高く評価されている。幡羅遺跡の中で遺構が良好に検出されている範囲を幡羅官衙遺跡として、熊谷市の西別府祭祀遺跡と合わせて国史跡「幡羅官衙遺跡群」に指定された。



国史跡幡羅官衙遺跡 館（建物跡柱穴列）

幡羅遺跡の周囲に広がる下郷遺跡では、7世紀後半～11世紀にかけての集落跡が分布しており、特に官衙域の南側には竪穴建物跡や掘立柱建物跡の濃密な分布状況が確認されている。

台地端部に郡家が所在し、崖下に湧水・河川が流れ、周囲に寺院・関連集落が配置する遺構分布状況は、榛沢・幡羅両郡家に共通する特徴といえる。

（深谷市教育委員会 平野 哲也）

早稲田大学

大久保山遺跡、浅見山I遺跡は、本庄市域の北半の南東縁寄りに位置し、上武山地の裾部から連なる丘陵部の東端、浅見山丘陵と呼ばれる孤島のような残丘上に立地する。浅見山丘陵は、大きく分けて枝分かれする3つの支丘からなり、中央の一番大きな支丘に大久保山遺跡、北側の支丘に浅見山I遺跡、南側の支丘に塚本山古墳群が所在する。

古代の浅見山丘陵

丘陵部の古代遺跡は、本庄台地や微高地上に展開する古代遺跡とは遺構の存続期間や隆盛期が異なる場合も多い。大久保山遺跡では、飛鳥時代（おおそ7世紀代）のころから集落としての継続性が高まりはじめ、奈良時代、平安時代に盛期を迎える。とくに台地上などでは集落の跡がたどりにくくなる平安時代中期後半（おおそ10世紀後半～11世紀半ば）以降に関しても、竪穴住居、掘立柱建物などの諸施設が継続して営まれ、集住の場が維持され続けたようである。

また、本庄市域の丘陵部では、金草窯を好例として寺院の瓦を生産した瓦窯とともに、瓦や瓦塔などの寺院もしくは仏教関連施設に伴う遺物が出土する傾向がみられる。

大久保山遺跡、浅見山I遺跡出土の瓦塔片

瓦塔片（瓦堂片を含む）が、大久保山遺跡の4地区と浅見山I遺跡から出土している。溝から出土した1点を除き、いずれも遺構外からの出土である（写真1）。4地区から出土した瓦塔片のうち、3個体は同一個体とされており、両遺跡合わせて3基分の瓦塔が出土していることになる。さらに瓦塔自体の特徴からも、3個体分の瓦塔は、



写真1 大久保山遺跡、浅見山I遺跡出土瓦塔片

時期的に異なる3種に区分できるとされている。

つまり、大久保山遺跡の南側谷部を囲む2個所に時期を違えて瓦塔が設置され、また別の谷をはさんだ北側の支丘には、また別の瓦塔が置かれた場所、浅見山I遺跡があったことが推定できる。

瓦塔の用途については定説をみないが、仏教信仰と密接にかかわる何らかの施設が丘陵部に集中して設けられたことは間違いない。

大久保山遺跡ⅢA地区75号住居跡出土遺物

丘陵部のこの段階の集落の一面を表す資料として、大久保山遺跡ⅢA地区75号住居跡出土遺物をみてみよう。

ⅢA地区は、浅見山丘陵の中央の支丘の南側斜面と低地部の谷口寄りの一帯で、75号住居跡は、同地区の中央に位置する平安時代前期後半（9世紀後半）の住居跡である。

出土遺物は、土師質の甕、坏や須恵質の坏、皿、灰釉碗を主に、輪羽口、石製紡錘車、砥石、鉄製紡錘車、刀子、鋏、銅、銅製の刀装具など多岐におよぶ。

石製紡錘車は3点出土しており、うち1点には、「上下」、「大井」などと読める線刻文字が不規則に刻まれている（写真2）。

刀装具は、帯に繋がる兵庫鎖などと鞘を連結する足金物で、類例の少ない資料である（写真3）。同地区の遺構外からも別の銅製刀装具が1点出土している。

刀子や刀装具が出土していることから、この集落が一般集落とは異なった階層の人々がかかわった場でもあったことが推定できる。



写真2 大久保山遺跡ⅢA地区75号住居跡出土石製紡錘車

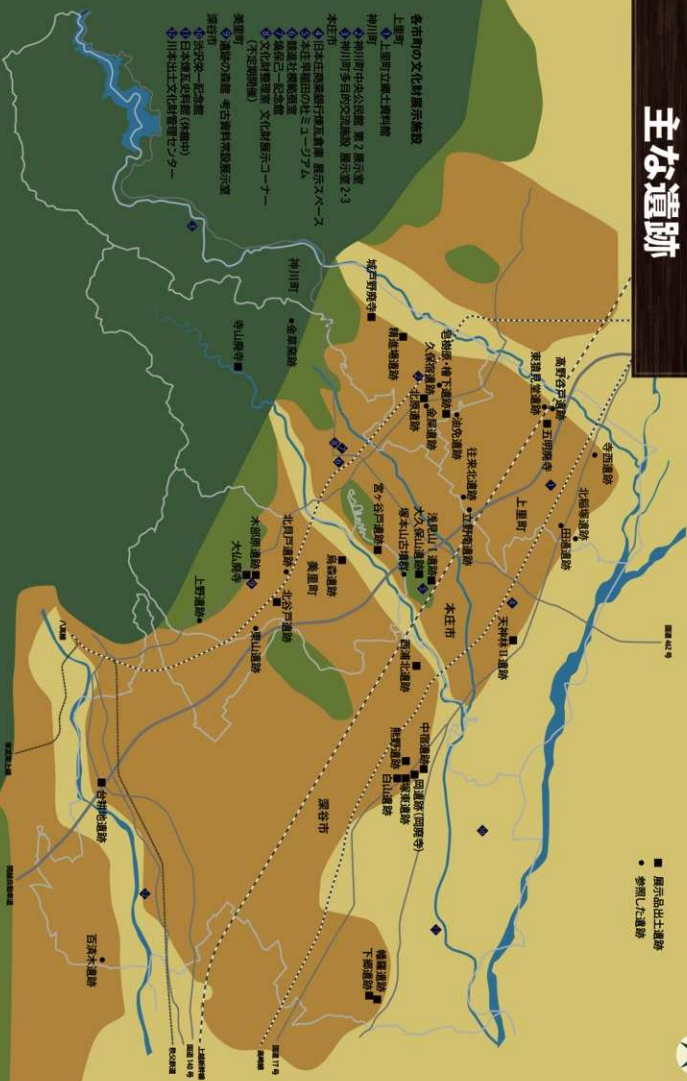


写真3 同住居跡出土銅製刀装具

古代の児玉・深谷地域 主な遺跡

各市町の文化財展示施設

- 上里町
- ◆ 上里町立農土資料館
- 神川町
- ◆ 神川町中央公民館 第2展示室
 - ◆ 神川町多目的交流施設 展示室2・3
- 本庄市
- ◆ 日本荘商業銀行歴史館 展示スペース
 - ◆ 本庄早稲田の杜ミュージアム
 - ◆ 歴史社歴史館
 - ◆ 現代巴一記念館
 - ◆ 文化財歴史館 文化財展示コーナー (不定期開催)
- 美里町
- ◆ 道路の森 考古資料情報展示室
- 深谷市
- ◆ 深谷第一記念館
 - ◆ 日本深谷史料館 (休館中)
 - ◆ 川本社土文化財館常設センター



■ 展示品出土道路
● 参照した道路

